

『金七十論』 —江戸時代のインド哲学研究—

日本大学 興津香織

1. 六派哲学

正統バラモン系統の6つの主要な哲学体系。輪廻からの解脱を究極の目標とする。

- ①ヴェーダーンタ学派 : 一元論に立ち宇宙の根本原理ブラフマンを考究
- ②ミーマーンサー学派 : 祭式・儀礼を哲学的に考究
- ③サーンキヤ学派 : 物質的原理と精神的原理の存在を認める二元論
- ④ヨーガ学派 : 解脱に達する手段としてヨーガの行を重視
- ⑤ニヤーヤ学派 : 論理学と認識論
- ⑥ヴァイシェシカ学派 : 原子論・多元論を説く自然哲学

2. サーンキヤ学派

人間存在を「苦」とみなし、その「苦」を除去する手段を探求する。

【開祖】カピラ（前350年頃～）

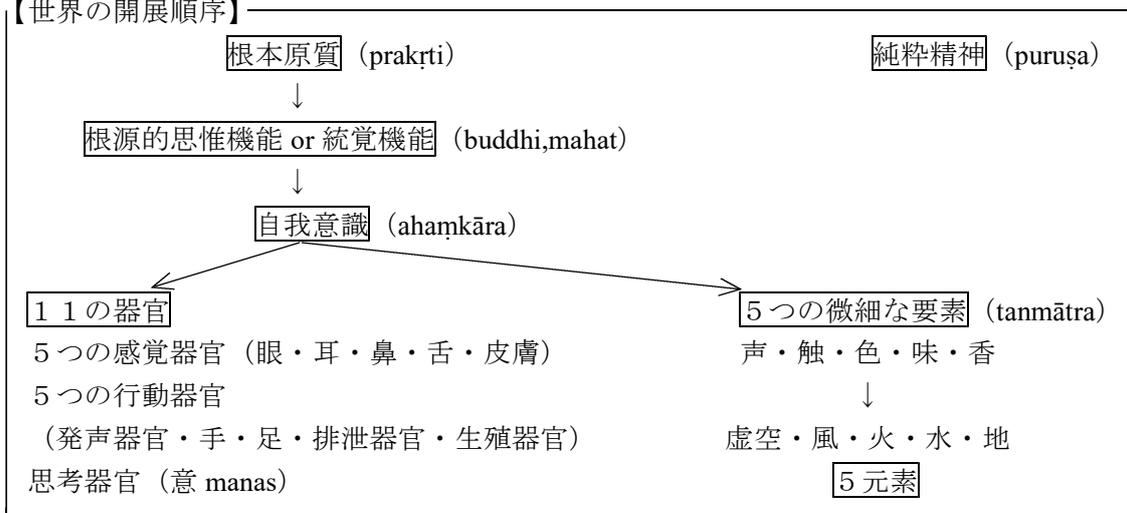
【根本テキスト】『サーンキヤ・カーリカー』イーシュヴァラ・クリシュナ（4世紀頃）

カピラの弟子にアースリ、その弟子にパンチャシカ（前150年～前50年頃）があり、その後ヴァールシャガニヤ（250年～350年頃）、ヴィンディヤヴァーシナ（4世紀）などの学者が現れたが、これらの学者の著作はすべて散逸し、断片が伝えられているのみ。現存する最古の原典が『サーンキヤ・カーリカー』であり、九種類の注釈書が存在。

- ①『金七十論』真諦訳（6世紀後半）、② Gaudapādabhāṣya（600年～700年頃）、③ Māṭharavṛtti（600年～700年頃）、④ Yuktidīpikā（700年頃）、⑤ Sāṃkhyavṛtti、⑥ Sāṃkhyatattvakaumudī（800年～870年頃）、⑦ Sāṃkhyatattvacandrikā、⑧ Jayamaṅgalā、⑨ Sāṃkhyasaptativṛtti

【内容】25諦（原理）を基礎とする観法の修行によって解脱にいたる。

【世界の開展順序】



【ポイント】「苦」の生存たる輪廻から離脱するためには、根本原質&そこからの開展物を純粹精神と明確に区別する25原理の知識を得なければならない。

“**純粹精神**”：実体としての個我であり、アートマンとも称し、原子大で、多数存在し、その本質は「知」(jñā) または「思」(cit,cetanā)。何らの活動を行うことがなく、ただ根本原質を観照（観察）するのみ。非活動者ともいわれる。常住不変で純粹清浄、生死も輪廻も解脱も本質的に関係しないもの。

“**根本原質**”：根本的な質料因。物質的で活動性を有し、三つの構成要素であるグナ（純質：サットヴァ、激質：ラジャス、暗質：タマス）から成る。これら三つの構成要素が相互に平衡状態にある時には静止にあるが、純粹精神の観照を機会因としてラジャスの活動が起こると根本原質の平衡状態が破れて世界の開展が開始。

“**根源的思惟機能or統覚機能**”：確認の作用を本質とし、心理や精神、確認活動の根源として精神的な作用の元となるものだが、根本原質から生じたものなので物質的なもの。身体の中の一器官。

“**自我意識**”：統覚機能の中のラジャスによって更なる開展が起こって統覚機官から生ずるもの。これも3つのグナから成る物質的な一器官。自己への執着を特質とする。「これは私である」とか「これは私のものである」、「私が為す」といった自己中心的な観念の元となっている。この自我意識は、常に「統覚機能」を「純粹精神」（＝本来の自我）であると誤って考える。この自我意識による誤った観念が輪廻の原因。

“**1 1の器官**”：自我意識においてサットヴァが優勢な時に生じるもの。

“**思考器官（=意）**”：思考作用を特質とし、感覚器官と行動器官の両者の機能を思考する役割を持つ。

【参考】長尾雅人責任編集『バラモン教典 原始仏教』（世界の名著1）中央公論社 1979 年

3. 江戸期の学僧によるインド哲学研究ブームの到来

- ・サーンキヤ学派の注釈書：『金七十論』（真谛（499-569）訳）
- ・ヴァイシェーシカ学派の注釈書：『勝宗十句義論』（玄奘（602-664）により 648 年に訳）

・『金七十論』：元禄十年（1697）に単行出版

出版後～二百年ほどの間に『金七十論』への注釈書が作成

散逸したものを含めて27点、作者は18人ほど

「天明の三哲」のうちの二人：智幢法住（1723-1800）、林常快道（1751-1810）（ともに真言宗豊山派）

☆明らかに『勝宗十句義論』に重点が置かれていたような印象

- ・『勝宗十句義論』：元禄十三年（1700）に単行出版
散逸したものを含めて約41点、作者30人ほど

☆幕府による学問奨励 ～教学研究の奨励と檀林制度～

【例】真言宗豊山派

檀林創設と八指磨業

八指磨業：豊山第32世能化の法住により制定（1793） 今日の“専攻”

学問奨励のための修学規定。仏教諸学を8科に分類し、投票によって各科の学頭を選出し奨学金を給付&学徒の指導に当たらせる制度。獲得した奨学金で研究成果や講義についての出版も行っていた。

【参考】宮元啓一・興津香織『インド二元論哲学へのいざない 一全訳註 真谛訳『金七十論』』花伝社 2026 年